

アメリカ先住民がもたらしたヨーロッパへの影響

—土地所有をめぐる思想を中心に—

The Native American Influence upon Europe

—Centering round Thought on Land Property—

三 石 庸 子

Yoko MITSUISHI

15 世紀末のヨーロッパとの遭遇以後、アメリカは大きな文化変容を強いられた。両者の出会いは、インカ帝国の滅亡などから、優勢な文化が弱小な文化を消滅させたという、一方的な関係として認識される可能性もある。しかし、逆方向の影響関係の大きさにも、注目する必要があると思われる。アメリカを媒介として、ヨーロッパが重商主義、それから植民地主義と、経済発展の道を辿っていったことは周知の事実であり、18 世紀にいたるまで、アメリカは政治的・経済的に、ヨーロッパにとって最大の関心事であったとさえいうことができる⁽¹⁾。また、直接の利害関係以外にも、このように風変わりな人びとが存在した、という最初の素朴な驚きから始まって、アメリカ先住民の存在はヨーロッパの人びとの注意を惹きつづけた。本論では、16 世紀から 19 世紀のヨーロッパ思想家の著作を取りあげて、その中にアメリカ先住民がもたらした影響を探る。アメリカという強烈な個性が、ヨーロッパの自己認識や世界観をどれほど変えていったか、土地所有をめぐる思想を中心に考察し、その影響の大きさを、アメリカがヨーロッパにもたらした文化変容の一端として、確認してみたい。

本論における試みは、1993 年にノーベル文学賞を受賞したアフリカ系アメリカ人作家トニ・モリスンが、アメリカ文学におけるアフリカニズムを明らかにした、『白さと文学的想像力』(1992) の視点を継承したものである⁽²⁾。モリスンは、「伝統的な、規範とされるアメリカ文学は、最初はアフリカ人、その後アフリカ系アメリカ人の、合衆国における 400 年におよぶ存在とは無関係であり、その存在によって知識を与えられることも、創られることもなかった」(4-5) という、「文学史家や批評家」の間に流布している「知識」に疑問を抱いた。そしてアメリカ文学の主要な作家の作品を分析し、「本物のあるいは作りあげられたアフリカニズムの存在が、作家たちのアメリカ性の意識にとって決定的に重要であった」(6) ことを証明しようとした。モリスンのアフリカニズムとは、「アフリカ系の人びとが意味するようになった、外延的、内包的黒さ」、および「それらの人びとに関す

るヨーロッパ中心主義的な学識に付随する、あらゆる領域の見解、假定、読解、誤読」(6、7)を表す用語である。すなわち、現実的な黒人存在と、その存在をめぐる現実的な政治・経済・社会的諸関係だけでなく、その存在が喚起するイメージ、理論、科学、偏見、幻想、妄想、嫌悪感、罪悪感まで含めた、全体的な影響関係を、アフリカニズムとして取りあげたのである。モリスンは、アメリカにおいて目の前に存在する「黒い」という、見えやすく差異の顕著な他者の存在は、そうした他者との関係とともに、アメリカ主流作家たちの想像力に深い影響を与えており、その作品の中に直接的に黒人表象として見いだされるだけでなく、たとえば、自己イメージとして撥ねかえり、作品中の「白さ」の表象にも反映されている、と示唆する(9)。そのように無意識の領域にまで入りこみ、作家の自己認識に深く関わって、アフリカニズムはアメリカ文学のアメリカ的といわれる特徴を形成してきたと、モリスンは指摘するのである。

ヨーロッパ文化とアメリカ先住民に関しても、同様の影響が指摘できるのではないだろうか。直接言及されていず、影響が意識されない場合にも、アメリカ先住民の存在はヨーロッパの思想家たちに強烈な印象を残し、その想像力に働きかけ、ヨーロッパ人の世界観構築に大いに関与したといえることができるように思われる。たとえば、ジョン・ロックによる有名な「こうして初め全世界はアメリカであった」という言葉からは、ヨーロッパにとってのアメリカという存在の大きさが、モリスンの表現に倣えば、ヨーロッパにおけるアメリカニズムの重要性が、窺えるといえるであろう。本論では6つのテキストトマス・モア『ユートピア』、モンテーニュ『随想録』、ロック『市民政府論』、モンテスキュー『法の精神』、ルソー『不平等論』、エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』—を時代順に取りあげて、そこに残されたアメリカ先住民の痕跡を探り、ヨーロッパ文化へのアメリカ先住民の関与の大きさを、多少とも実証したいと考えている。なお、ラテン語、フランス語、英語、ドイツ語の原典に依拠したテキスト研究には至らず、翻訳書を活用した考察であることを、最初に断っておきたい。

I. 16世紀①:『ユートピア』(1516)

トマス・モアの『ユートピア』は、「私」が、ラファエル・ヒスロディという人物から、彼が実際に体験したユートピアという共和国についての話を聞く、という構成となっている。このラファエルが、ポルトガル生まれで、アメリゴ・ヴェスプッチの航海に参加し、最初の3回は同行したが、そのまま現地に留まった24人の乗組員の一人であると紹介されている。そして、彼らが現地の人びとの援助を得て、赤道直下の不毛な砂漠地帯のむこうにある、緑の大地の都市まで到達し、そこから様々な国を訪問し、ユートピアを知ったという展開となっている。「あの4回の航海—この航海記は今では印刷になって誰でも入手できます—」と作品の中で触れられているのは、モア自身も読んだと推測される、実際に出版されたアメリゴの航海記である。そこには残留する24人のことも書か

れており、こうした現実的な設定のために、ユートピアは出版当時、実在する国であると信じられた⁽³⁾。

ヨーロッパ的文明人であるユートピア人は、ヨーロッパが「野蛮」と捉えたアメリカ先住民像とはまったく違っているし、また、最初の設定以外にはユートピアを新世界アメリカと結びつけるような言及は何もされていない。従って、ユートピアを現実のアメリカと同一視するとしたら、明らかに的外れである。しかし、先のアメリカの航海記は大変な評判を博し、ヨーロッパ中の人びとに読まれたのであり、どこか遠くの地には想像もつかないような世界が存在するかもしれないと、人びとが空想を広げたとしても不思議はない。ポール・アザールは、1726年の『ガリヴァー旅行記』以降、様々なユートピア物語が生まれ、それらには「このジャンルの師匠であるジョナサン・スウィフトの影響が感じられる」(11)と、こうした旅行者たちの登場を18世紀の特徴として捉え、注目している。しかし、そうした流行以前に、1624年ごろ書かれたフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』、さらに遡って『ユートピア』を、その先陣として位置づけることができると思われる。『ニュー・アトランティス』も、ペルーから船出して遭難し、出会った島として描かれており、明らかにアメリカへの関心が背景となっている。モアの時代はまさに大航海時代の幕開けの時期であるから、その衝撃も大きかったはずである。モアはアメリカ先住民の存在を知って、新鮮な驚きに打たれ、イギリスの現実的政治世界での日頃の問題意識を、新たな目で見える視野を得たのではないだろうか。そのように捉えて、『ユートピア』という著作の発想の源を、影響として指摘されることの多いプラトンの『国家論』より、むしろアメリカであった、とみる解釈も可能であるように思われる。

先駆的な共産主義者としてのモアを、『ユートピア』の中に考察した『トマス・モアとユートピア』(1926)の中で、カウツキーは、「モアは、ヒューマニスト、政治家としては、かれの同時代の第一級人物の一人であったが、社会主義者としてはまったく唯一無比なひとであり、どんな同時代人よりもだんぜんすすんでいた」とモアを評価し、「その社会主義はどこからでてきたのであろうか」(248)と疑問を投げかけている。

ところで、ある種の思想家は、かれの時代の物質的諸関係にもとづきながら、しかもかれの時代より一時期さきをすすむことができることがある。……

トマス・モアは、このような大胆な思想的飛躍に成功したまれにみる思想家の一人であった。というのは、かれは、資本主義生産関係のほんの黎明期に、はやくもその本質をひじょうにふかく洞察しており、かれが資本主義的生産様式の害悪をのぞくために、空想的設計により資本主義に対置させたところの生産関係は、現代社会主義のきわめて本質的な多くの特色をそなえていたほどである。(250、251)

このようにカウツキーにとって、「モアの時代に社会主義理論の傾向をもち、それをつくる能力をそ

なえたものがモアだけであった」という事実は大きな疑問であり、それを解明しようとしたカウツキーの与えた理由は、「モアの個人的性格、思想的訓練、経済的活動、および英国の経済的情勢」(252)であった。ヨーロッパ内の現実社会での生活に関連した、こうした要因に加えて、モアの時代に突然外から降ってきた啓示として、アメリカ先住民からの示唆に注目すれば、カウツキーの見る、時代に突出したモアの謎が、容易に説明できるといえるのではないだろうか。

マルクスは、『資本論』第七篇第二章「いわゆる本源的蓄積」の第二節と三節の注で、『ユートピア』を引用している(941、961-62)。羊毛マニュファクチュアの興隆によって、牧羊地にするために農地を追われた農民たちの貧困化を訴えている、最近イギリスの羊が人間を食い殺すという箇所である。資本主義的商品経済確立の過程を当時のイギリスに辿っていくと、まず、「賦役の金納化と領主直営地の借地化が急速に進展し、15世紀半ば頃までには貨幣地代が一般化」して、「土地の売買、借地化が広く行われるようになった」という変化が起こっていた⁽⁴⁾。そしてその結果、農民の貧富の差が拡大し、富農層による農地統合と、15世紀半ばからの領主による農地の牧羊地化が進み、農地の集積が行われていった。モアが当時の社会問題として痛切に意識していたことは、第一次囲い込み運動と呼ばれるそうした農地の集積の、牧羊地化という一側面であったわけである。しかし、19世紀のマルクスが分析できたような、封建的土地所有関係の解体と資本主義的生産様式の萌芽を、モアが十分に認識することは不可能であったと思われる。『ユートピア』では、「多くの農民が自分の土地から追出されてしまう」、とか「食料品」や「羊毛」の値段が高くなる(27、28)、といった弊害が述べられ、「これも元はといえば、少数の人間の途方もない貪欲からなのです」(29)、といった分析がみられるだけである。

その一方で、モアの創作したユートピア国家では、マルクスの視野をモアが共有していたかのように、重要な二側面において、特色ある設定がなされているのである。マルクスは、囲い込みによって土地を追われた農民は、封建的な生産においては多くは自営農民であったこと、また自営でなく、当時の農業の賃金労働者でさえ、封建制下では共有地の用益権を与えられており、土地を利用することができたという事実を指摘し、囲い込みによって引きおこされた、共有地喪失などの土地の所有形態における変化を明確にしている。当時はまた、貨幣地代など、商品経済の発達により、貨幣の重要性が増大していた時期でもあった。こうした変化による農民の貧困を産み出さないためには、どのような国家が望ましいだろうか。ここで、『ユートピア』の結末部を参照してみよう。

『ユートピア』の最後で、ラファエルの話を聞き終わった「私」は、懐疑的であった。「このユートピア人の風俗や法律などの中には、必ずしもその成立の根拠が合理的とは思われない点が沢山あるように」感じられたからというのである。そして、その中でも「根本的な問題としては、ユートピアのすべての法律制度の主要な基礎となっているもの、つまり貨幣を少しも用いないで行われる(なぜなら、この貨幣こそあらゆる高貴なるもの、荘厳なるもの、尊敬すべきもの、威厳あるものなど、およそ一般の見方によれば、まさに国家の真の栄誉とされているところのものを、根底より破壊するものであるからだ)生活の共有制という点において、特にそうであった」(181-82)と述べて

いる。すなわち、あまりにも現実的に根拠がない、空想的な特色として、貨幣がないことと、土地に限らないが、生活一般の共有制という二つの要素が特定されているのである。さらに、補足的に『ユートピア』からつぎの箇所をあげてみたい。

ですから私はユートピアの、つまり、すくない法律で万事が旨く円滑に運んでいる、したがって徳というものが非常に重んじられている国、しかもすべてのものが共有であるからあらゆる人が皆、あらゆる物を豊富にもっている国、かようなユートピアの人々の間に行われているいろいろなすぐれた法令のことを深く考えさせられるのです。……プラトンの慧眼はよく、あらゆるものの平等が確立されたら、それこそ一般大衆の幸福への唯一の道であることをみぬいていたのです。そして、この平等ということは、すべての人が銘々自分の私有財産を持っている限り、決して行わるべくもないと私は考えています。(第一巻、61-2)

これを、アメリゴ・ヴェスプッチの航海誌からの、つぎのような二箇所の引用と比較してみよう。

かれらには指揮者のようなものはなく、整然と行進するのでもなく、いわば各自が各自のあるじというわけです。戦闘の原因は、征服とか領土拡張の野心とか、でたらめな貪欲さにあるのではなくて、過去において相互のあいだに生じた敵意によるのであります。……こうしてかれらは同情によって行動するのであります。かれらには裁判もなければ罪人を罰することもなく、父親や母親が子供を懲らしめることもありません。驚くべきことであるかどうか、とにかく、かれらが言い争っているのを一度も見かけませんでした。/……住居は共同であり、……土地によっては家屋の間口奥行ともにきわめて大きく、ただ一棟に六百人もの人がいるのを見ました。……かれらの財貨といえば、色彩の華やかな鳥の羽だとか、魚の骨でつくった数珠玉だとか、……われわれにはなんの価値もないようなたくさんものがあります。かれらには商売というものはなく、物を買ったり売ったりしません。つまるところ、自然にあたえられたもので生活し、それに満足しているのであります。わがヨーロッパやその他でもちいられる財貨、たとえば金、宝石、真珠、その他の財貨をすこしも尊重しません。そういうものがかれらの土地にありましても、それを入手するために労働したり、価値をみとめることをしません。ひとに物をあたえるのにじつに気前がよく、いかなるものを求められても、それを拒絶するとしたら不思議なことです。(「第一回の航海」、270、273)

また私有の財産というものがなく、すべてが共有となっています。かれらには国王も官憲もなく、各人がみずからのあるじです。……かれらは天然自然のままに生きており、禁欲主義者というよりは享楽主義者というほうが正しいでしょう。かれらのあいだには商人というものは存在せず、交易ということをいたしません。……かれらの寿命は一五〇歳で、病気になることはまれで

あり、悪い病気にかかっても、なにか草木の根をもちいて治療してしまいます。/……あの大陸では土地はきわめて肥沃であり、かつ快適でありまして、多くの丘、山、無数の谷、水量豊富な巨大な河、保健に適し滾々と湧き出る泉、……があります。(『新世界』、329、331)

両者を比較してみると、アメリカ先住民は自然の中のにびやかに暮らしていて、明らかにヨーロッパ的なユートピア人とは違っている。しかし、初めてアメリカ先住民を知った時、その人びとが幸福そうで、争いも知らずに人生を享受しているように見える姿は大変印象的であろう。羊に追い出されるイギリス農民と比較してみると、いっそうその素朴な人びとの幸福が際立つのではないか。そして、その人びとが住居を共有し、貨幣も存在しないという点が、何よりもヨーロッパ人には驚きであったように思われる。『新世界』からの後者の引用では、「私有の財産」がない、ということが明言されている。モアが、こうしたアメリカ先住民の社会に触れて、プラトンの思想よりさらに進むことができ、ユートピアという国を創りだした、と解釈することができるのではないだろうか。

最後にアメリカのテキストについての解説を紹介しておく。まず 1503 年に、アルベリクス・ヴェスプシウスによる、4 枚からなるラテン語のパンフレット『新世界』が、パリとフィレンツェで発行され、まもなくイタリア語、ドイツ語、オランダ語、フランス語などに訳されて、多くの版を重ねたという。その後フィレンツェで 16 枚のイタリア語の『四回の航海において新たに発見せる陸地に関するアメリカ・ヴェスプッチの書簡』が出版された。それが、プトレマイオスの『世界誌』のラテン語の序説の準備をしていた若いドイツ人マルティン・ヴァルトゼーミュラーに注目され、1507 年にプトレマイオスの本文とアメリカの『四回の航海』から成る、ラテン語の『世界誌入門』として、フランスのサン・ディエで発行されて、大変有名になったという。それゆえ、訳者ヴァルトゼーミュラーの記載したとおりに、新世界はアメリカと呼ばれるようになったという⁽⁵⁾。モアが『ユートピア』で言及しているのは、この版であり、この書をモアが読んだことは間違いない。最初に出版された『新世界』の方は『ユートピア』で言及されていず、読まれなかった可能性もあるが、ラテン語で書かれ、翻訳され、多くの版を重ねていたというのであるから、モアの目に触れた可能性のほうが高いと思われる。

以上アメリカ先住民の『ユートピア』への影響関係を考察したが、この影響はインスピレーションとしての働きかけであり、繰り返しになるが、実際の先住民社会との類似を指摘しているわけではない。ヨーロッパは、その後も関心をもってアメリカ先住民の実像を追求しつづけていくのであり、19 世紀になると、旅行記ではなく、文化人類学的研究からの知識の提供も見いだされるようになる。モアのユートピア人とアメリカ先住民との大きな違いは、ユートピア人は ① 農耕に励む、② 労働を重視する、という二つの特徴であろう。ロックやマルクスと同じように、モアも労働に価値を置く近代ヨーロッパ的視点を共有しており、たとえばつぎのように、先住民の土地を奪うことを正当化する、のちのロックの思想と同じ発想も、ユートピア人の考えとして書かれていることを、付けくわえておきたい。

ある国の国民がその土地をただ無意味に遊ばせているくせに、自然の法則にしたがってその土地によって生活しようとする他の国民にそれを拒むことは、これこそ戦争のもっとも正当な理由と彼らは考える。(2巻、5章、p. 91)

農耕に励まないで土地を放置しているのであれば、すなわちアメリカ先住民のように、勤勉な農民とみえないような土地利用者がいる場合、他の国民が戦争をしかけ、その土地を奪うことは、自然法に従って正当とみなしているのである。

II 16世紀②：『随想録』

モンテーニュの『随想録』1巻第31章「カンニバルについて」(c. 1577)で⁽⁶⁾、アメリカ先住民が主題として取りあげられていることは有名である。カンニバルは人食い人種のことを意味するのであるが、さすがに現代ではせいぜい、野蛮人について、と訳出されるくらいである。現代の我われにはショッキングなタイトルであるが、上でみたアメリゴの航海記でも、『新世界』と第一回の航海の中に、人びとは肉は人肉しか食べないとか、なぜおいしい人肉を食べないのか訝しがられたと書かれているし、コロンブスの航海日誌でも人肉を喰うカリブ族のことが書かれている。特筆すべきことは、モンテーニュが人肉を食べることの、その人びとにとっての意義を認めており、「その民族の間には、少しも野蛮なところはないと思う」(400)と考えていることである。アメリカで行ったスペインの残虐行為を批判している、3巻第6章の「馬車について」からの引用とあわせて、モンテーニュのアメリカ先住民観を以下に挙げてみよう。

だがあそこ〔新大陸〕にもやはり完全な宗教、完全な政体、完全なもろもろの制度習慣があるのだ。なるほど彼らは野生(sauvage)である。ちょうど我々が、自然が独りで、いつもの歩みの間に産み出した果実を野生と呼ぶのと同じ意味では。だが本当は、我々が人為によって変更し一般の秩序から除外したものをこそ、野蛮(sauvage)と呼ぶべきであろう。……我々と比較して彼らを野蛮と呼ぶことはできない。我々の方があらゆる野蛮さにおいて彼らをはるかに越えているのだから。/……彼らは新しい土地を征服しようとして戦わない。・・・自然の豊かさを満喫しているし、その国境を拡張する必要がないほどにゆたかなのである。……これらの父たちはその共通の相続者たちのために、このゆたかな自然の賜物を彼らの共有財産として譲る。(1巻31章「カンニバルについて」、400-01、407)

そこに住む人たちの返答や彼らとの交渉の大部分は、彼らが生まれつきの利発さにおいて、またその正しさにおいて、すこしも我々におとらないことを示している。……けれども信心や、法

律の遵奉や、慈悲や恵与や、忠節や率直となると、我々はそれらを彼らほどに持たないために得をし、彼らはその点では我々よりも優れているためにかえって損をし、売られたり裏切られたりした。(3 巻 6 章「馬車について」、1646)

モンテニューは、「土地を征服しようとして戦わない」、「ゆたかな自然の賜物を彼らの共有財産」としているといった、土地所有に関する先住民特有の姿勢について触れている。しかし、そうした一部の特色にとどまらず、その人びとに与えられた「野蛮」という評価の価値を逆転させる視点を創りあげた点が、モンテニューがアメリカ先住民から受けた、もっとも注目すべき影響ではないかと思われる。モンテニューのアメリカ先住民観が、文明の墮落を説いた 18 世紀のルソーに影響したこともよく知られている。モンテニューは、ヨーロッパ人と比較してそれらの人びとを賛美し、ヨーロッパを批判的に見ているが、こうした異邦人の視野を導入してヨーロッパ社会を批判的にながめる書物が、ユートピア物語や旅行記と並び、18 世紀に流行したことは、先に触れたポール・アザールが詳述している⁽⁷⁾。また、同時代の影響としては、16 世紀のイギリスで『随想録』はよく読まれており、「カンニバルについて」の英語訳がほぼそのまま、シェイクスピアの最後の劇である『テンペスト (あらし)』(1611) に借用されている事実がよく知られている⁽⁸⁾。

モンテニューを通して、アメリカ先住民がヨーロッパに間接的に与えた影響は大きいといえるが、モンテニュー自身はどのようにその存在を知ったかという点、一つはやはり旅行記である⁽⁹⁾。もう一つさらに重要な源は、モンテニュー自身がたいへん関心をもっていたらしく、1562 年にルアンまで赴き、そこを訪れていた三人のアメリカ先住民のうちの一人と、通訳を介して対話した体験である。話した内容が意味深かったというわけではないのだが、モンテニューはその思いがけない、あるいはたわいない見解に対して驚いたり、呆れたりすることなく、そうした発想をもたらした背景にある彼らの生活、文化、社会への認識を深めているようにみえる。アメリカの旅行記のように、珍しい世界への好奇のまなざしではなく、他者の視点に寄りそう姿勢が、モンテニューの他者描写には感じられるのである。このような理解者によるアメリカ先住民像であったために、深い印象を与えたのかもしれない。

モンテニューは、アメリカ先住民と出会ったエピソードに触れる際、直接話法で彼らの見解を記述している。すなわち彼らの声を取りあげたといえるのである。モンテニューは、また別のかたちでも、彼らの声に耳を傾けた可能性もある。インカ帝国最後の皇帝となるトゥパック・アマルの義兄で、その前の皇帝であったティトゥ・クシ・ユパンギが、聖職者と書記の手を借りて 1570 年に作成した、スペイン国王に向けた文書を読んでいた可能性が読みとれるのである⁽¹⁰⁾。自分に都合よく事実を歪めている所もあることから、批判される書ではあるが、ヨーロッパ人が残した多くの旅行記や歴史書と違って、この文書はアメリカ先住民の視点が反映されているという点で、貴重である。モンテニューが読んだという実証はないのだが、モンテニューの「馬車について」とユパンギの文書からの引用を、以下に対比してみたい。

……他方新世界の人々からは、言葉といい宗教といい容貌態度といいまったくちがう髭もじゃの人間〔スペイン人〕が、思いもかけずあれほどに遠い、彼らが人が住むとも思わなかったほど遠いところから、大きな見も知らぬ怪物〔馬〕に乗って攻めよせてくるのを見たときの、その無理からぬ驚きを取り除いた上で、両方をくらべて見なければならぬのである。……それに我々の鉄砲や大砲の万雷のような響きも考えに入れなければならない。(1647)

使者のインディオたちは目撃した人びとのことをピラコチャと呼んだが、それは、一つには、その人たちの身なりや容貌がわれわれとはかなりかけ離れていたからであり、いまひとつには、その人たちが銀の足をした巨大な獣に乗っているのを目にしたからである。使者が銀の足と言ったのは、実は陽に映えて輝く蹄鉄のことである。……さらに、インディオが彼らのことをピラコチャと呼んだ理由のひとつに、彼らが威風堂々としていて、しかも、容貌が立派であったこと、それに容貌が人によりかなり異なっていたことも挙げられる。つまり、彼らの中には、黒いあごひげをたくわえたものもいれば、赤みがかったあごひげをしたものもいたからである。また、それ以外の理由としては、……彼らがイリャパを持っていたことも挙げられる。イリャパと言うのは、われわれが雷鳴に付けた名称で、インディオがイリャパと言ったのは、実は火縄銃のことである。すなわち、インディオは火縄銃を天に轟く雷鳴だと思ったのである。(22、23)

インディオが初めてヨーロッパ人と遭遇した時、神（ピラコチャ）だと思ったということは、よく知られているが、それは自分たちより優れた人びとであると認めたからではなく、ユパンギの解説から分かるように、見知らぬゆえの誤解に基づいた最初の印象にすぎないのである。事実、ユパンギの父で、処刑されることになるマンゴ・インカは、スペイン人たちは自称するような「ピラコチャンの御子」ではなく、「スーパイの申し子であり、スーパイよりも質が悪い」(122、123) とのちに判断を下している。モンテーニュが、インディオの立場に立って、人びとの遭遇の驚きをごく自然な反応として解説して、ヨーロッパ人の優勢を絶対化・神秘化することのないよう、心を砕いている様子が窺われる。そうしたモンテーニュの説明から、彼がユパンギの文書を読んでいることが、推測されるのではないだろうか。モンテーニュのアメリカ先住民理解は、そのように、直接アメリカ先住民の声に耳を傾けようとする姿勢から得られたものであったと思われる。

III 17 世紀：『市民政府論（国政二論後編）』（1690）

バーバラ・アーネイルの『ジョン・ロックとアメリカー英国植民地主義の擁護』（1996）によると、『国政二論』を当時のアメリカとの関係から考察する研究は、やっと 1950 年代頃から現れはじめたという⁽¹¹⁾。1960 年のピーター・ラスレットによる研究のように、従来考えられてきた時期より

10 年ほど前の 1680 年前後に書かれているといった考察もあり、ロックの論の背景に関する認識が変わり、もっと同時代のイギリスの政治に深く関わって産まれたものであると考えられるようになってきたという。アーネイルはつぎのように主張する。「市民政府論でロックが繰り返す、アメリカへの言及を真剣に受け止めることによって、『国政二論』は、イギリスの懐疑的な人びと、およびアメリカの先住諸民族と他のヨーロッパ列強の対立する要求に対して、新世界におけるイギリスの植民地政策を擁護するために書かれた、ということを示すことができる。とくに、『国政二論』におけるアメリカインディアンへの言及のほとんどを含む、所有についての有名な章は、イギリスの『より高次の』所有権の力強い擁護を通して、17 世紀の先住民の土地奪取を正当化するために書かれたということが、論じられるであろう」(2)。実際、ロックの所有権に関する論が、アメリカ先住民を常に引き合いにだして組み立てられていること、また、自然状態ではすべてが共有であるが、所有権が獲得されるのは労働によってであるとして、農耕に専心しないアメリカ先住民の権利を排除する理論となっていることは、テキストから容易に読みとれる。以下に 5 章「所有権について」から、ロックの主張を抜き出してみる。

囲込みを知らず、いつまでも共同の借地人として生きている未開のインディアンの喰べる果実あるいは鹿肉は、それが彼の生命を養うために彼の役にたつに先立って、まず彼のものであり、彼の一部であって、他の者がそれについてなんらの権利をもたないようなものでなければならぬ。(5 章 26、p. 32)

こうしてこの理性の法によって、鹿は、それを殺したインディアンのものとなる。……自然がそれをおいた共有状態から取出すために労働が用いられたという事実によって、この労を払った者の所有に帰するのである。(同 30, p. 35)

しかし所有権の主要な対象は、今では、土地の果実や、そこに生存する獣ではなくて、土地そのもの—その他の一切のものは土地の中に含まれ、土地の上に見出される—であるが、土地の所有権も同じようにして獲得されたことは明白だと思う。……神が、この世界を全人類共有のものとして与えた時、彼は同時に人に労働を命じた。そうして人間の欠乏状態の故に、人間は労働をすることを必要としたのである。(32, p. 37) そうしてまた労働に基づく所有が、土地の共有に優越し得るということは、よく考えてみるとそう変なものではない。何故なら、すべてのものに、価値の差等を与えるのは実に労働に他ならないからである。(40, p. 46)

この点については、アメリカの諸民族が示している例ほど、明瞭な証明はないだろう。彼らは土地は豊富にもっているが、その生活に愉楽を与えるものはすべて貧弱である。(41, p. 46)

こうして全世界は、初めはアメリカのような状態にあった。いや現在のアメリカ以上であった。というのは貨幣というようなものはどこにも知られていなかったからである。(49, p. 54)

労働によって価値が生まれ、価値を生み出したことで所有権が生ずる。そして所有権を保証するた

めに、法や国家を必要とする、というのがロックの主張である。イギリスの植民による先住民の土地奪取は、スペインの非人道的な暴力的支配とは違い、勤勉に働く植民者による道徳的な行為とされるのである。

上の引用で、「困込みを知らず、いつまでも共同の借地人として生きている未開のインディアン」とか、「全世界は、初めはアメリカのような状態にあった」という一節から、ロックがアメリカとヨーロッパを二つの世界というより、一つの発展、進化の状態という視野から見ていることが分かる。モンテーニュが意識して避けようとしていたヨーロッパ人の優越は、ロックによっては抵抗なく受けいられているようにみえる。

IV 18 世紀①：モンテスキュー『法の精神』（1748）

法律は「それらが作られた対象であるひとびとに適しているべき……で、……法律は国の自然的諸条件に、……その生活様式に、……住民の宗教に、彼らの性情、富、人数、交易、習慣、習俗に適していなければならない」（第一部、第一篇、3 章）と考えるモンテスキューが、その論の中でアメリカについて考察していることは、容易に推察できる。第三部の第一八編「土地の性質との関係における法律について」という項目の下、9, 13, 14, 17 章がアメリカに関係した分析であり、それらに 7 章と 15 章とを加えて、モンテスキューのアメリカ解釈を検討してみたい。

ロックとの共通点は、第 7 章「人間の事業について」で、「人間は、みずからの配慮とよき法律によって土地を自分らの居住にいっそう適したものにした。……勤勉な国民は彼らとともに消滅することのない諸善を作り出すのである」（122）と述べて、自然に手を加えてできた農地や河川を好ましいものと考えている点である。しかし、冒頭の引用にあるように、モンテスキューは、人間とはそれぞれ違った条件のもとに生きているのであるから、それぞれにふさわしい法があるという考え方をしており、ヨーロッパと違う価値をアメリカにも見いだしている。第 9 章では、「アメリカにあれほど多くの未開民族を住まわせているのは、その土地が、人が生きていくに十分な果実を自然に産出するからである。……私は、ヨーロッパでは、土地を手入れなしに放っておいたとしたら、こうしたあらゆる利点が得られるとは信じない。ここでは森林しか現れず、樗やその他実のならない樹木しかほとんど育ってこないことであろう」（123）と、農耕という労働の価値は、ヨーロッパの自然にのみ必然とされたのであり、アメリカに等しく当てはまるものではないと考えている。

さらに第 13 章「土地を全く耕作しない人民のもとにおける民事の法律について」、第 14 章「土地を全く耕作しない人民のもとにおける政治状態について」、第 16 章「貨幣を全く使用しない人民のもとにおける国制上の法律について」では、モアが賛美していたユートピア国家の美德を、アメリカのものとして見いだしている。「民法典をとりわけ膨大なものとしているのは土地の分割である。このような分割を行わない国民にあっては、民事の法律はごくわずかしかないう」（13 章、p.

126)、「これらの人民は大きな自由を享受している。なぜなら、彼らは土地を耕作しないため、土地に全く結びつけられていないからである」(第 14 章, p. 127)、「土地を耕作しない人民の自由を最も保障するのは、貨幣が彼らには知られていないことである」(第 17 章, p. 129)。

土地を耕作せず、貨幣のない人びとは、ロックのように、進化の段階の下位に位置づけられることなく、逆にわずらわしい法律も必要ない、「大きな自由」を享受できると考えられている。モンテスキューもアメリカに関する旅行記を読んでいるので、たぶんそこに見られる人びとの暮らしぶりに、アメリカが描写しているような、ヨーロッパにない良さを見いだしたのだと思われる⁽¹²⁾。第 15 章「貨幣の使用を知っている人民について」では、そうした認識が明確に表現されている。「土地の耕作のためには貨幣の使用が必要である。この耕作は多くの技術と知識とを前提としている。そして、技術と知識と欲望とは常に同一步調で進むのが認められる。こうしたものはすべて、価値の標識の確立へと導くのである」(128)というように、農耕と貨幣が、一方では技術や知識という価値へ、そして他方では欲望という、負の側面へ通じやすい属性を伴うと述べられている。欲望や法律に絡めとられ、自由を失っているヨーロッパが、アメリカと対比されて批判的に見られているということができよう。モンテスキューは、ペルシャ人の目でフランスの偏見を露にする『ペルシャ人の手紙』(1721)という小説の作者でもあった。このようなヨーロッパへの批判的な視線は、同時代のルソーにおいては、さらに明瞭となっている。

V 18 世紀②：ルソー『不平等論』(1755)

野蛮から文明への進化を直線的に捉える点は同じであるが、ロックとは正反対の価値観を打ち込んでいるのが、ルソーである。ルソーも、ロック同様、アメリカ先住民を例として引いて、自分の論を証拠立てている。モンテーニュの影響も受けているが、カライブ人についての知識は、ロックの場合と同様に、旅行記に拠っている⁽¹³⁾。以下、『不平等論』から抜粋してみたい。

農業などというものは、大地から食料を引き出すためというより、大地に我々の好みに合う食べ物をむりやり産み出させる役に立つだけのものなのだ。……それなのに、いったいどうして辛い労働などに一生を捧げる気になる人間がいるのであろうか。/……現存する諸氏族のなかで、今に至るまで自然状態から遠ざかることのもっとも少なかったカライブ族こそ、炎熱の地に暮らしているにも関わらず、そしてそのような風土はこの種の情念を激しく燃え上がらせるものと常に思われているにも関わらず、まさにその愛の発露においてもっとも穏やかで、もっとも嫉妬に燃えることの少ない人たちであることを見るなら、それはあまりにも明らかなことではないか。/……初めて或る土地に囲いをして、これは私のものだと言うことを思いつき、且つそれを信じてしまうほど単純な人たちを見出した人物こそ、まさに市民社会の創設者であった。そのとき、杭を引き抜き、溝を埋め

て、同類たちに向かい、「このいかさま師の言うことを聞くな。果実は皆のものであり、大地は誰のものでもない。それを忘れたらお前たちは身の破滅だ」と叫ぶ者がいたなら、如何に多くの犯罪、戦争、殺戮を、如何に多くの惨事、災厄を、人類は免れることになったであろうか。/……この大きな変革は冶金と農業という二つの技術の発明によって齎されたものである。人間たちを都市化し、文明化し、そして人類を破滅に導いたものは、詩人にとっては金と銀とであったろうが、哲学者にとっては鉄と麦とであった。であるからアメリカ大陸の未開人たちは、鉄も麦も知らず、知らぬがゆえに今なお未開のままに止まっている。その他の諸民族も、冶金だけを行って農業を行わずにいる限り、野蛮なままであるように見受けられる。そして何故ヨーロッパが、世界の他の地域よりも早期にとは言わぬまでも、少なくともより恒常的に、そしてよりいっそう高度に文明化しているかというその最大の理由は、おそらくヨーロッパがもっとも豊富に鉄を埋蔵しており、もっとも大量の麦を産出するからであろう。/……ヨーロッパの大臣の骨身を削るような、それでいて人の羨む激職は、カラิบ人の目にどのような光景として映ずるのであるだろうか。この愚鈍な未開人は、こんなにも煩わしい生活をするくらいなら、何度残酷な死のほうを選んだことであろう。往々にしてその煩わしさは、善を為す喜びによって緩和されることさえもない。(第1部、22 : p. 60, 61, 42 : p. 82-3, 第2部、1 : p. 90, 20 : p. 102, 57 : p. 134)

土地の囲い込みによる大地の私有化、労働による農耕、鉄の使用は、ヨーロッパとアメリカ先住民とを区別し、文明と野蛮とを分ける基準として、18世紀にはほぼ共通の認識となっていたようである。ロックとは対照的に、ルソーは、文明化は自然状態からの人間の墮落であると捉えた。そうした視野をルソーに与えたのが、「自然状態から遠ざかることのもっとも少なかった」とルソーが考えている、カラิบ人であったことは明らかである。アメリゴの航海記で見られた、のびやかで幸せそうな先住民のイメージが、18世紀のヨーロッパ人の心をも捉え、新たな思想への啓示となったのである。ただし、最後の引用にみられる「愚鈍な未開人」とか「煩わしい生活をするくらいなら、何度残酷な死のほうを選んだことであろう」という解釈に明らかなように、ルソーの先住民像はヨーロッパ人による一方的なイメージであり、モンテーニュの場合とは違って、理解を目指して到達した認識ではなく、他者を他者として理想化した虚像であることは、注意しなければならない。

そうではあっても、ルソーの理想化された自然人には、強く訴えかける真実の迫力が感じられる。たとえば、上の引用で、「このいかさま師の言うことを聞くな。果実は皆のものであり、大地は誰のものでもない。それを忘れたらお前たちは身の破滅だ」と叫ぶ、ルソーの自然人の言葉は、白人にこれ以上土地を追われつづけることを拒否して戦った、ショーニー・インディアンのテクムセ(1768-1813)が残した、つぎのような同朋への警告と、決然とした響きを共有しているように思われる。

どのような部族にも、お互い同志にさえ、ましてよそ者に対して、売るなどという権利はない。……国を売るだって？ 土地はもちろん、空気や大海を売ったらよいではないか。偉大なる精霊は、

その子らが使うために、そうしたすべてをお創りになったのではないか (Nerburn 41)。

VI 19 世紀：エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』(1884)

『家族・私有財産・国家の起源』の第一版序文の中で、エンゲルスは本書が、ルイス・モーガンの『古代社会 (または、野蛮時代から未開時代をへて文明時代にいたる人類進歩の道程の研究)』(1877) に、「ギリシャとローマにかんする歴史的な諸章」、「ケルト人とドイツ人にかんする諸章」、「経済方面の詳しい記述」などの部分を補足して、書きあげられたものであると述べている。また、故人となっていた「カール・マルクスこそ、モーガンの研究の成果を、彼の—ある限度内ではわれわれのといってもよい—唯物論的な歴史研究と関連させて叙述し、そうすることによってはじめてモーガンの研究の成果の全意義を明らかにするつもりでいた人にはかならなかった」(11) と断っている。このモーガンの研究が、アメリカ先住民、イロクォイ諸部族の氏族社会についての研究に基づいているので、本書にアメリカ先住民の影響を辿ることができるのである。

なぜエンゲルスやマルクスがモーガンの研究を評価したかは、理解しやすい。モーガンは、ロックやルソーのように、アメリカ先住民がヨーロッパの古代社会を映し出しているとして、一貫した発展の歴史の中に位置づけたのである。その序言でモーガンは、「人類種族の歴史は、根源において一であり、経験において一であり、進歩において一である」(20) と述べている。歴史は「野蛮」、「未開」、「文明状態」と三つに区分され、さらに「野蛮」と「未開」は、「下層状態」、「中層状態」、「上層状態」と細分される。「未開」の最後にあたる「上層状態」は、「鉄の製造とともに始まり、音標文字の発明および文章の構成における書字の使用をもって終わった。ここに文明が始まるのである」(33-4) と解説されていて、鉄と文字を知らないという、まさにアメリカ先住民の特性をもって、文明の境界が引かれている。

エンゲルスがもっとも関心を惹かれたように思われるのは、アメリカ先住民の家族の研究によって、その婚姻関係に見いだされた、母権制の存在であるが、その点でもエンゲルスは、アメリカ先住民をギリシア、ローマ以前の発展段階にあると、位置づけている。エンゲルスは、つぎのように書いている。「これまでのすべての歴史家にとって謎であったギリシアとローマの氏族は、インディアン氏族から説明され、こうして原始史全体にとって新しい基礎がみつけだされた。文化諸民族の父権氏族の前段階として本源的な母権氏族があった—というこの再発見が原始史にたいしてもつ意義は、ダーウィンの進化論が生物学にたいして、またマルクスの剰余価値論が経済学にたいしてもつ意義に等しい」(1891 年 4 版序文、p. 28)。また、別の件ではつぎのような表現が使われている。「……あまりに遠い昔の時期のことなので、それがかつて現存していたという直接の証拠を社会的化石のなかに、つまり発達が遅れた野蛮人のあいだにみつけることは、ほとんどできないであろう」(第 2 章 p. 46)。

「社会的化石……つまり発達が遅れた野蛮人」という表現に、先住民諸民族に対する 19 世紀のヨーロッパ人らしいエンゲルスの歴史的視野がよく表れているように思われる。しかし、その一方で、モーガンもエンゲルスも、ルソーと同様、文明化への発展の方向を全面的に肯定はしていない。エンゲルスが本書によって明らかにした、女性の地位についての啓発的な指摘、「母権制の転覆は、女性の世界史的な敗北であった。男子は家庭内でも舵をにぎり、女子はおとしめられ、隷従させられ、男子の情欲の奴隷かつ子どもを生む単なる道具となった」（2 章、79）という宣言は、一方で、自由と平等を享受するアメリカ先住民の女性が存在してはじめて、ヨーロッパ人にもたらされたといえよう。モーガンは、「自由、平等、友愛は、たとえ形式化されなかったとしても、氏族の根本的原則であった。……これは独立と個人の尊厳の意識が一般にインディアンの性格の属性であることを説明するに役立つのである」（第二篇第二章、123）と、先住民の人びとの美德に気づいているし、また、エンゲルスもつぎのように賛嘆の声を発している。

それにこの氏族制度なるものは、いかにも子どもじみていて単純であるにもかかわらず、じつに驚くべき制度なのだ！兵士も憲兵も警察官もなく、貴族も王も総督も知事や裁判官もなく、刑務所もなければ、訴訟もなく、それでいて万事がきちんとはこぶ。……貧乏人と困窮者はありえない。一共产主義的世帯と氏族とは、老人、病人、戦争不具者に対するみずからの義務をわきまえている。万人が平等で自由だ一女子もである。……そしてこういう社会がどのような男女を生み出すかは、墮落していないインディアンに接したすべての白人が、この未開人の人格的威厳、率直さ、性格の強さ、勇敢さに驚嘆していることが、これを証明している。（3 章、130）

「自由」と「平等」は、ロックらが打ちたてた近代市民社会が奉じる価値であり、先住民や黒人奴隷を除外してもちいられた、アメリカ合衆国の建国の理念として名高いのであるが、排除されたアメリカ先住民社会の中に、このようにより高次の質をもった価値として見いだされているのは、皮肉である。文明と野蛮というように縦に並べれば、アメリカ先住民の氏族社会は、どれほど美德に満ちたものであっても、「没落する運命にあったことを忘れてはならない」（237）ということになるが、エンゲルスも二つの社会を横に並べて比較した時には、どちらが好ましいか、はっきりと意識していたように思われる。

文明時代は、古い氏族社会にはとうていやれなかった事柄をなしとげた。だが文明時代がそれをなしとげたのは、それが人間のもっともきたくない衝動と欲情をつき動かし、人間の爾余の全資質を犠牲にしてそれらを発展させたことによってである。露骨な貪欲が、文明時代の第一日から今日にいたるまでの推進的精神であった。一にも富、二にも富、三にも富、しかも社会の富ではなく、この個々のみじめな個人の富、それが文明時代の唯一の決定的な目的だった。（9 章、237）

エンゲルスは、共産主義社会という理想をめざしたが、モアのユートピアの場合と同様、アメリカ先住民の存在が、彼のあるべき理想社会の貴重なイメージ源ともなったのではないだろうか。滅びゆく民族、過去の遺物として位置づけられながら、19 世紀にもアメリカ先住民は、ヨーロッパに指針となる理想、よりよき未来への展望を与えつづけたといえる。

【注】

本論は、第 33 回新英米文学会大会での口頭発表に加筆したものである。

(1) 中南米をめぐる重商主義時代の列強の争いについては、増田義郎『略奪の海カリブ』参照。17 世紀後半には「黒人奴隷貿易がヨーロッパのあらゆる王権の政治かけ引きの中心課題となった」(68) という、R・メジャフェの指摘もある。その後、北米植民地で戦われたアン王女戦争 (1702-13)、四国同盟戦争 (1719-21)、ジェンキンズ・イヤ戦争 (1739-42)、ジョージ王戦争 (1740-48) などのほか、ヨーロッパのスペイン継承戦争 (1701-14) や七年戦争 (1756-63) も含めて、18 世紀の戦争には、すべてアメリカをめぐる利権が絡んでいた。

(2) 翻訳があるが、原文より、筆者による訳文を使用した。Cf. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*

(3) カウツキー、299-300 頁、およびアメリゴ・ヴェスプッチの『四回の航海』の増田義郎による訳注 (58) を参照 (316 頁)。

(4) 山口重克編『市場経済—歴史・思想・現在—』の第三章「資本による生産」(今東博文執筆) の 1「封建的社会関係の解体」を参考にして、50、51 頁から引用した。

(5) 『アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集』に付けられた増田義郎による解説 (251-53 頁) を参照した。

(6) 『随想録』の第 31 章「カンニバルについて」の解説で、この章の書かれた時期が 1577 年前後と推定されている (394 頁)。

(7) ボール・アザールは、「まず、トルコのスパイ、次いでシャム人」、モンテスキューのベルシャ人、オリヴァー・ゴルドスミスのシナ人、ヴォルテール『自然児』のヒューロン人、モロッコ人、その他ペルー人、イロコイ人、インド人と、続々とヨーロッパに出現した文学上の異邦人を列挙している (8-10 頁)。

(8) ベン・ジョンソンは『ヴォルボーン』の中で、仲間の劇作家たちが何でもモンテーニュの『随想録』から借りてくることを揶揄している (ピエール・ヴィレー『モンテーニュの〈エッセー〉』214-15 頁参照)。シェイクスピア作『あらし』2 幕 1 場 135-143 行が、『随想録』からの借用である。

(9) Lopez de Gomora, *Histoire generale des Indes con laconquista de la Mexico y de la Nueva-España*, 1553. Andre Thevet と Jean de Lery の報告 (1557 年にブラジルに上陸した Villegaignon (1510-71) の航海に随伴した)。

(10) 岩波文庫では『インカの反乱』という題で、訳されている。

(11) 1965 年のジョン・ハリスンとピーター・ラスレットによる『ジョン・ロックの蔵書』によると、航海記や旅行記の類は 195 冊もあり、そのほとんどがヨーロッパ人によるアメリカへの旅に関するものであった。Cf. Arneil, p. 24.

(12) Le P. Labat, *Nouveau Voyage aux îles de l'Amerique*, 1722. Solis, *Histoire de la conquete du Mexique* ; , Garcilasso de la Vega, *Histoire du Perou* ; . Lopez de Gomora (モンテーニュの項参照). William Dampier, *Nouveau Voyage autour de Monde*, 1711. Garcilaso de la Vega, *Comentarios reales de Peru* ; Thomas Gage, *A New Survey of West Indies*, 1648. フランソワ・ピラールの旅行記の第 2 部 15 章 ; フレジェ『南海チリ・ペルー旅行記』(1716)

(13) 『不平等論』戸部松実の訳注によると、デュ・テルトル神父『サン=クリストフ、グアダループ、マルチニク、その他アメリカ諸島一般誌』(1667) 増補版を愛読し、カラライブについての知識の大半はそこから来ている (原注 III 1-b, 286 頁) (Du Tertre, *Histoire generale des îles de saint Christophe, de la Guadeloupe, de la Martinique et autres dans L'Amerique*, 1654, 1667)。Jacques Gautier d'Agoty, *Observations sur l'histoire naturelle, la physique et la peinture*, 1752-58, Charles-Marie de La Condamine, *Relation abregee du voyage fait a l'interieur de l'Amerique meridionale*, 1745 (この人物と個人的な交流があった)。

【引用文献】

- アザール、ポール『十八世紀ヨーロッパ思想——モンテスキューからレッシングへ』行人社 1987 年。
- エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』新日本出版社 1999 年。
- カウツキー、K『トマス・モアとユートピア』法政大学出版局 1969 年。
- シェイクスピア『あらし』岩波文庫 1950 年。
- ヴィレー、ピエール『モンテーニュの〈エッセー〉』木魂社 1985 年。
- ベーコン、フランシス「ニュー・アトランティス」『世界の名著 20』福原麟太郎責任編集。中央公論社 昭和 45 年、507-550 頁。
- ヴェスプッチ、アメリゴ「アメリゴ・ヴェスプッチの書簡集」『大航海時代叢書 1』岩波書店 1965 年、249-338 頁。
- 増田義郎『略奪の海カリブーもうひとつのラテン・アメリカ史』岩波新書 1989 年。
- マルクス、カール『資本論』第 1 巻、大月書店 1968 年。
- メジャフェ、R.『ラテンアメリカと奴隷制』岩波現代選書 1979 年。
- モア、トマス『ユートピア』岩波文庫 1983 年。
- モルガン、L・H『古代社会』上巻、岩波文庫 1986 年。
- モンテーニュ『モンテーニュ随想録』白水社 1995 年。
- モンテスキュー『法の精神』中、岩波文庫 1989 年。
- 山口重克編『市場経済—歴史・思想・現在—』名古屋大学出版会 1994 年
- ルソー、ジャン＝ジャック『不平等論—その起源と根拠』戸部松実翻訳・訳注・解説。図書刊行会 2001 年。
- ロック『市民政府論』岩波文庫 1968 年。
- Arneil, Barbara. *John Locke and America : The Defence of English Colonialism*. Oxford : Clarendon Press, 1996.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1992.
- Nerburn, Kent (Ed.) *The Wisdom of the Native Americans*. Novato, Cal. : New World Library, 1999.

【Abstract】

The Native American Influence upon Europe

—Centering round Thought on Land Property—

Yoko MITSUSHI

This study emphasizes the impact the encounter with Native Americans gave on Europe in the period of the great voyage and from thenceforth. As for the European influence on the Americas, we know how Native Americans were obliged to experience a great change in their life. Since, for example, the fact is well known that the Inca Empire collapsed, we might simply assume that the weaker civilization of Native Americans was overwhelmed by or absorbed into the more powerful European one. Acculturation, however, was not one-way. We should note the fact that the Americas remained to be the center of attention among European countries culturally as well as economically and politically until, at least, the eighteenth century. In this paper, with emphasis on the reverse influence, I will show how Native Americans affected and formed part of European thought, especially around the concept of land property.

This study is the application of what Toni Morrison did in her book, *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination* (1992), to the relation of Native Americans with Europe. In that book, Morrison made it clear how the presence of African people had worked on the formation of American literature, even though critics, in general, assumed that the canonical texts of American literature had nothing to do with those black people living for 400 years in the United States. Analyzing the texts by canonical writers, Morrison suggested that even their symbolic use of whiteness might represent their sense of guilt toward black people reflecting upon themselves. Morrison calls the deep and pervasive influence “Africanism,” including even prejudice, psychic trauma and scientific researches the African presence inspired. In a similar way, the influence the presence of Native American people inspired in Europe—what may be called Americanism— can be detected in the texts of European writers.

I will trace the Native American presence in the following six European texts from the sixteenth century to the nineteenth: *Utopia* (1516), *Les Essais*, *Two Treatises on Government* (1690), *Discours sur l'origine de l'inegalite parmi les hommes* (1754), *De l'esprit des lois* (1748), *The Origin of the Family, Private Property and the State* (1884). All of these texts seem to show that European thought was formed more or less under the strong influence of Native American culture.